

伊勢市の浜郷地区まちづくり協議会が、若年層を対象にした防災活動に力を入れている。避難所運営ゲーム(HUG)などを取り入れた活動が評価され、昨年末には防災活動の優れた団体をたたえる「みえの防災大賞」の奨励賞を受賞。小学生を対象にした防災教育の現場をのぞいてみた。(関俊彦)

避難所運営ゲームで身近に

伊勢・浜郷 小学生に防災教育



HUGに取り組む小学生＝伊勢市黒瀬町の浜郷小で

二月上旬、地区内にある浜郷小に立寄った模造紙に、年齢や性別、家族構成、持病の有無、HUGに熟中していた。学校など事情の異なる避難者のカードを配置し、制限時間内に

避難所で起こりうる問題を記したカードもある。児童らは「教室は個室にして、病气やペットがいる人に使ってもらおう」「緊急物資は搬入しやすい玄関付近」などと意見を交わしていた。南平由妃さん(二)は「避難所の生活が大変だと知る良い機会だった。この経験を、万一の時に活用したい」と話した。

HUGは静岡県が考えた学習教材で、協議会は児童向け仕様を開発。共同開発したNPO法人「ミューチャルエイド」(南伊勢町)の森本宏さん(五)は「ゲームだから、子どもも自然と防災に関心を持っている」と説明する。

防災専門家の森本さんによると、阪神淡路大震災や東日本大震災では、学校が避難所となる場合が多かったが、さまざまな事情を持つ避難者が

急に集まったことで混乱を招くことも多かった。HUGは、円滑な避難所運営に有効な訓練とされ、北海道などからも視察に訪れている。

森本さんは「避難所となる小学校のことは、その学校の児童が一番分かっている。子どもの視点で寄せられた意見も多く、大人が勉強になることも多い」と話す。

協議会の森本幸生会長(八)によると、浜郷地区は伊勢湾台風(一九五九年)の被害経験や、氾濫の危険のある勢田川沿岸に立地することから、もともと住民の防災意識は高い。二〇一三年に設立された協議会は、全住民五千百人に手作りの防災冊子を配布。避難訓練や防災講話なども定期的に実施してきた。

森本会長は「子どもが守られる存在ではなく、守る側になってほしい」と考え、HUGを含めた防災教育を一四年から開始。「子どもが体験した防災訓練を家庭で話せば、親も関心を持つ。若い世代が防災を知ることが、安心安全のまちへの近道」と力を込める。

まちづくり協推進 子から親へ体験伝えて

見聞いせしま

見聞いせしま